

ヴォイド空間による形態構成的特徴に関する考察

日大生産工（院）○ 砂川 慶太

日大生産工 坪井 善道

1. はじめに

建築を語ることで社会を語ることはできないだろうか。建築は社会と断絶され、社会において、必要なものではないと考えられている風潮がある。この断絶された関係を再び繋ぐことはできないだろうか。そこで本論では、まず社会と建築が如何に関係し、繋がるかを述べたい。そしてその繋がりを建築として設計できれば、建築をつくることで社会を語るができるのではないだろうか。こうして本研究が建築の中で自閉したものではなく、社会にまで射程を延ばした計画であることの表明となる。また、本稿は修士設計を通じ具体的な提案の論述である。

2. 研究の背景と目的

2-1、近代社会からポストモダン社会へ

今、社会はどのような状況なのだろうか。批評家である東浩紀¹⁾は、近代社会では、社会全体が共同の価値観を持っていたが、ポストモダン社会では、それは崩壊し、多様な価値観を持ち、個別化し、ある特定の価値をもった「小さな物語」が無数に存在する社会へと変貌したと論じている。では、ポストモダン社会における問題点はなんだろうか。思想家の宮台真司²⁾は、個人の価値が尊重され「島宇宙」が生まれたが、そのなかでのみ自閉し、他者との接点が無くなりつつあることがポストモダン社会の問題であると述べている。では次に、この問題は物理空間である建築とどのように結びついているかを検証していく。

2-2. ジェネリックシティ

まずは、現在の都市の構造がどのようなになっているかを明らかにしなければならない。現在の都市の状況を明確に分析した書としてコールハースの「錯乱のニューヨーク」³⁾が挙げられる。1970年代にマンハッタンに対して書かれた本であるが、今日でも資本主義と都市との構造を捉える批評として有効だと考える。この本の中でコールハースは、資本主義の原理によってつくられた都市は、多様化する欲望に応えるべく、個別化していくと述べている。そして、個に向かうなかで、全体との関係が乖離していくと。つまり前述した社会の問題である「個別化」と、都市は同質の問題を都市は抱えている。

2-3、公共性

ではこれらの問題に対してどうすれば良いであろうか。先に私の結論を述べると、「公共性」というキーワードが共通してこれらの問題に対抗できるのでないかと考えている。公共性とはなにか。アーレント⁴⁾ (1906-1975) は公共性を、公共的空間は、複数の価値観を許容し、多元的に関わりを持つことができる場であると述べている。つまり、公共的概念は、ポストモダン社会における問題として挙げた、人が自閉し他者と関係性を持たないことに対してのカウンターになる。

2-4. 公共的空間

では物理環境としての建築は公共性を如何

にして獲得することができるだろうか。多義的で他者を受け入れることができる寛容な空間とは。ロバート・ヴェンチャーリ⁵⁾は、寛容な空間を獲得するための条件を、多様性と対立性であることを示している。対立性とは異なる質同士を隣接することである。つまり、両極の質を持ち、幅を持つことで、従来あるような一義的な空間とは異なる、多義的な空間を生成されることを示している。

2-5. オランダ構造主義的アプローチ

対立性を用いた建築家として、オランダ構造主義で知られるアルド・ファン・アイク(1918-1999)がまずあげられるであろう。彼は対現象を用い空間を設計し多様性を建築にもたらすことを試みた。その思想はオランダ全土へと広がり、この思想は現代建築家であるコールハース、彼の下で働いていたMVRDVにも引き継がれている。彼らは、独自の対立性を用いており、作品を分析することにより公共的な質をもつ空間設計の方法を探る。

3. 分析

分析は、すべての階の平面図、立面図など十分に構成を把握できる作品を対象とした。対比関係である、機能の決められた空間をM A S S、機能のない空間をVOID と分ける。図面と図面から立ち上げた3Dモデルを参照し、M A S SとVOIDの用途、形態、体積の比率など多角的に比較し、対立性の構成の分析をする(表1)。また、平面図より、ヴォイドの空間に対して、視覚的(開口等)、物理的(ドアなど)に接触関係にある空間を、ヴォイドの干渉空間と定義し、ヴォイドが全体に対してどこまで影響を与えているかを分析した。

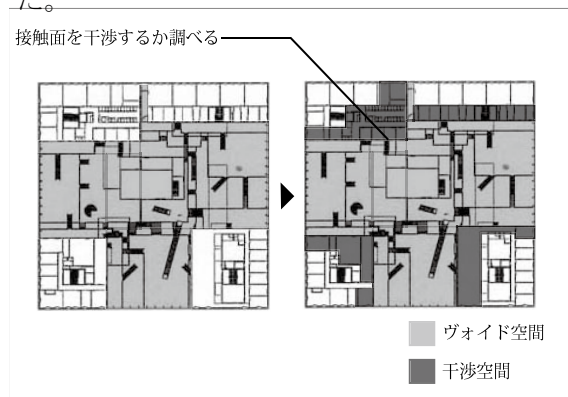


図1 干渉領域

表1 分析リスト

建築家	建物名前	用途	階数	用途		Vの関係性		Vの形態		形の対称性	
				M	V	比率	干渉	手法	型	全体	V
Aldo van Eyck	Three Primary School	小学校	1	クラスルーム	ブレイルルーム	40	100	反復	連続体	×	×
	Orphanage	小学校	2	クラスルーム	ブレイルルーム	15	70	反復	連続体	×	×
OMA	Melun Senart	都市計画		変動	保存	55	100	スリット	分散	×	×
	Block6	商業施設	5	ショップ	動線	30	100	残余	連続体	○	×
	Kunsthal	複合施設	3	ホール, 展示室	動線	5	90	貫通	連続体, 動線	○	×
	T G B	図書館	11	図書室	公共	20	100	穴	反復	○	×
	Z K M	アートセンター	13	複合	動線	20	100	動線	連続体, 分散	○	×
	Seattle Public Library	図書館	11	書庫	公共	30	0	反復	分散	×	×
	The Hague City Hall	オフィス	24	内部	外部	15	100	スリット	連続	×	×
MVRDV	Quai Branly	美術館	7	展示室	動線	20	100	スリット	連続	○	○
	Unterfohring Park Village	都市計画	7	複合	広場	50	100	残余	連続	×	×
	RVU	オフィス	1	オフィス	動線	5	45	スリット	連続体	○	○
	Han Faculty	大学	5	複合	公共	20	55	残余	包括, 貫通	○	×
	Barneo House (Plot12)	住宅	4	住宅	外部	35	90	貫通	連続体	○	×
	Effenaar Cultural Center	コンサートホール	6	複合	コンサートホール	35	70	残余	包括, 貫通	○	×
	Flipped Neighbourhood	集合住宅	23	住宅	外部	85	100	反転	分割	×	×
	Ballroom	美術館	3	美術館	外部	75	95	穴	包括, 貫通	○	○
	Celosia	集合住宅	5	住宅	外部	45	100	穴	反復	○	○
	Superstair	集合住宅	22	住宅	外部	50	100	反転	切断	×	×
	Mirador	集合住宅	22	住宅	公共	15	25	穴	包括, 貫通	○	○
	Grill	集合住宅	32	住宅	外部	65	100	反復	貫通, 反復	○	○
	Watervillas	集合住宅	2	住宅	広場	30	0	持ち上げ	オープン	○	○
	Noah's Arc	美術館	9	展示室	外部	30	100	穴	中央貫通	○	○
	Carved Out Tower	集合住宅	25	住宅	外部	20	100	反復, 連続	隣地	○	×

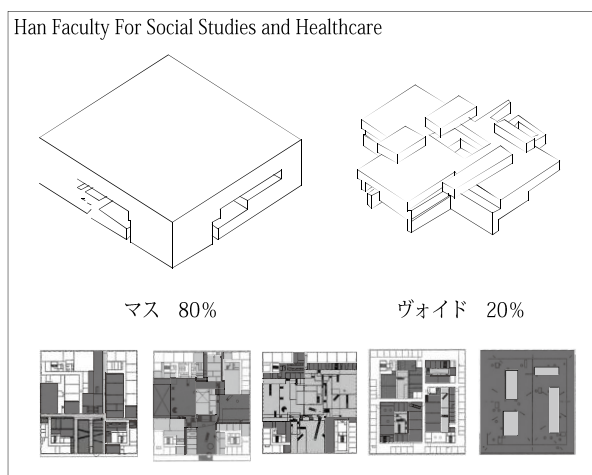


図2 作品分析

4 分析と考察

4-1.対比の要素

ヴォイド空間を何とするかは、各々建築家によって異なる。ファンアイク、OMAは内部においてヴォイド空間を対比する傾向が強く、MVRDVに関しては、内部により対比した外部空間を建築に貫入させる傾向が強い。また図3のように、建築のヴォリュームそのものが外部を分割するためのヴォイドとしての役割を持ち、地と図が反転した関係性をつくりだしている。また、動線をヴォイド空間として用いる形式もすべての建築家において共通した特徴でもある（図3）。

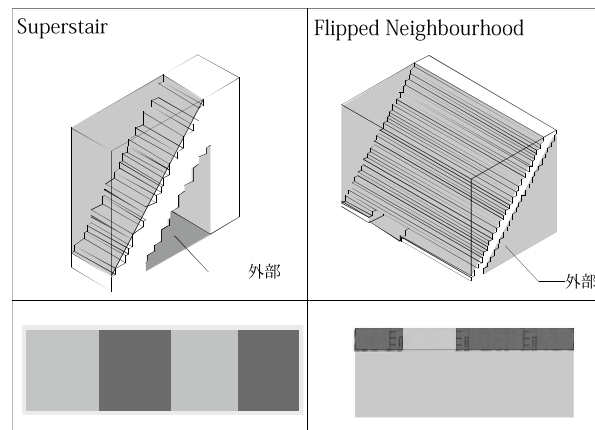


図3 地と図の反転例

4-2.同様なヴォキャブラリー

ファンアイクとOMA、MVRDVとでは建築を取り巻く状況は異なる。しかし、「手法」に注目して分析をすると、異なる建築家同士が同様な「手法」を用いていることが分かる。図5のように、一見すると異なった手法に見えるが、同じ形状のヴォイド空間を「反復」させ、「連続」させることで多様な空間をつくりだすなどの、共通項があることがわかる。同じ手法を用いながら、OMAら現代の建築家は、ファンアイクらが平面に用いていた手法を、断面に対して用いている。

図4 全体がシンメトリーでヴォイドがアシンメトリーの例

	Barneo House	Han Faculty	ZKM	Effenaar Cultural Center	Carved Out Tower
全体					
ヴォイド					

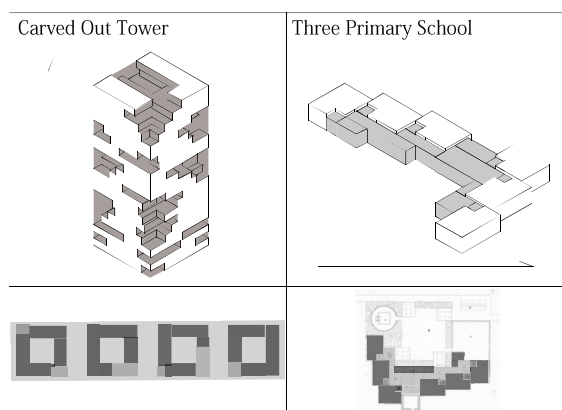


図 5 同様な手法の例

4-3. ヴォイドの影響

ヴォイドの「比率」に関しては、共通する傾向はみられない。しかし、「干渉領域」では、多くの作品が 80%以上を示し、ヴォイドが建築全体に影響を及ぼしていることがわかる。特に、図 6 のようにヴォイドの用途に「動線」を用いることで、ヴォイドの比率が低くても、全体に大きな影響を及ぼせることがわかる。

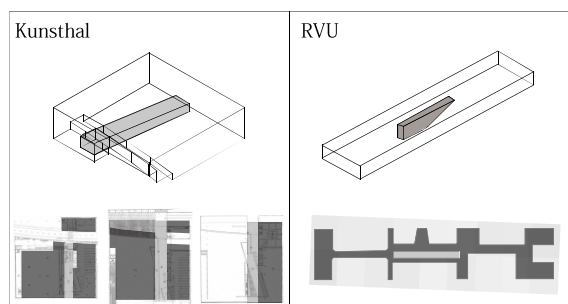


図 6 動線を用い干渉領域を拡大する例

4-4. ヴォイドのアイデンティティ

全体がシンメトリーな形状をしているにもかかわらず、ヴォイドの形状がアシンメトリーである作品が半数近くみられる(図 4)。

5. まとめ

対比性を隣地することで寛容な空間が生まれ、他者を受け入れる公共性のある空間ができると述べた。各々の建築家は、機能の決められた空間と機能のない空間の対比を用いた。建築において予測不可能な変化をする機能に

対して、建築家が創造を許された機能のない空間＝ヴォイド空間を、建築のアイデンティティと捉える手法は、現代の資本主義において有効な方法である。また、単純に対比するのではなく、ヴォイドを「反復」「連続」させることで、均質なヴォイド空間を避ける。これは、空間が個人の知覚で解釈できるようにするために輪郭をつくりだすファンアイクの名手であるが、OMA、MVRDV もまた、この手法を用いている。このように、ただ対比性を用いるのではなく、ヴォイドを建築の核として捉え、建築ごとで形は変化していきそこにアイデンティティを持つことが重要である。

以上に述べてきたように、多義的な空間性をもつヴォイドを建築に埋め込むことで、公共的空間を建築に埋め込むことが可能である。それらが他と交換不可能な空間として都市へと存在することで、多様な公共空間を都市へと取り戻すことができると考える。それらのヴォイドはすべてが関係しあい、全体と繋がっており、多中心な都市を形成するのである。そこでは情報技術にはできない濃密なコミュニケーションが建築を通して行われるはずだ。

6. 今後の展開

今後、得られた結果を用い東京における公共空間の実現を修士設計として展開させていく。

参考文献

- 1) 情報環境論集 東浩紀 講談社
- 2) 制服少女達の選択 宮台真司 講談社
- 3) 錯乱のニューヨーク コールハース 筑摩書房
- 4) 人間の条件 ハンナ・アーレント 筑摩書房
- 5) 建築の多様性に対立性 ロヴァート・ヴェンシューリ 鹿島出版会
- 6) S M L XL Rem Koolhaas Monacelli
- 7) OMA@work. a+u Rem Koolhaas a+u
- 8) Mvrdv: Km3 Mvrdv Actar
- 9) MVRDV FILES/Projects 002-209 a+u Mvrdv
- 10) Aldo van Eyck, Works Aldo van Eyck